

館山支部だより Vol.99

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230

3月末のクルーズ船の横浜寄港に端を発し、新型コロナウイルスの感染拡大防止に係る水際対策として発令された自衛隊の災害派遣命令が先月15日に終結しましたが、この間の活動に従事した隊員は延べ8、670名に達しております。引き続き各地の自衛隊病院での感染者の受け入れが現在も続けられています。

これらの活動がマスメディアに報道されることは滅多にありませんが、3月以降の「隊友」紙には活動内容・状況が細かく掲載されています。これらの状況を知ることにより隊員の労苦をねぎらうとともに、機会をとらえて世間の人々にこれらを”知らせしめる”ことも自衛隊OBとしての務めではないかと考えます。

＜川村 記＞

支部の活動概要

《6・7月活動実績》

6.15(月) 千葉県隊友会通常総会(千葉市内、中止)
6&7月 NPO海・河川浄化運動協力(館山市内、中止)
6月 21空群・飛行幹部候補生100k行軍声援(中止)
7.15(水) 千葉県隊友会前期理事支部長会議(千葉市民会館)
7.25(土) 7月支部役員会(コミセン)

《8・9月活動予定》

9月下旬 館山航空基地開隊67周年記念行事
(現在まだ具体的に把握できておりません)
9.27(土)9月支部役員会

点 描：コロナ禍の下での自衛隊の訓練行事

世界的なコロナ禍で社会・日常生活等の面がかつてない厳しい試練を余儀なくされていますが、自衛隊もその例外ではありません。ごく一例を紹介します。

◇中東派遣1次隊帰国「コロナで150日間下船できず」

中東海域の情報収集のため2月2日から派遣されていた護衛艦「たかなみ」が先月30日任務を終えて横須賀に寄港。途中、給油補給寄港地でも下船(上陸)できないという”前代未聞の環境”下での任務と言ってもよいでしょう。

◇海上自衛隊遠洋航海練習艦隊出航「大幅な行程の短縮」

7月7日、練習艦「かしま」と「しまゆき」が横須賀を出航。今回はコロナ禍の影響で当初の5月下旬の出航予定を延期するとともに給油のためのシンガポール寄港(上陸なし)のみで、44日間の訓練を終えて来月22日には帰国という異例な遠洋航海(注)になりました。しかも7月7日出航の翌日、南シナ海で警戒監視行動中の米空母艦隊との協同訓練という”実戦的な訓練”を体験しております。

(注)今年度は戦後64回目を迎える遠洋航海で、従来、5箇月以上にわたり10カ国近い国々との友好親善とともに初級幹部の慣海性、国際的な感覚の養成に資することを目的としたもの。

トピックス

千葉県隊友会会長から表彰される 7/15伝達

☆個人表彰 野田末盛理事役(海)

隊友会支部活動の推進・活性化に努めるとともに、防衛弘済企業館山出張所長勤務を通じ、基地の隊員に対する隊友会活動のアピールに努め、定年退職隊員の隊友会への入会実績の向上に貢献

☆団体表彰 館山支部

支部機関紙の継続発行を通じた会員との意思疎通、県隊友会HPへの投稿による隊友会活動の情宣に努めるとともに、地元OB(館空)会との連携強化に意を用い、地域社会活動に貢献

75歳以上の終身会員に対する「会運営協力金」のお願い

令和2年度事業計画等の書面による議決権の行使により議案が承認され、75歳以上の(旧制度の)終身会員に対して会運営協力金の納入(寄付)を依頼することになりました。支部長としては本件の検討の段階で異論を述べましたが、(旧制度の)終身会員が75%を占めている現状を考慮した場合、会費収入で成り立つ県隊友会の財政を少しでも改善する方策として、現時点では(75歳以上の終身会員に対する)会運営協力金の依頼も止む無しと考えております。ご理解ご協力のほど切にお願い致します。

＜支部長＞

寄 稿：その後の「南極観測支援」事情 (中編)

＜前号から続く＞ 「しらせ」は毎年11月中旬、180名の乗組員と1、100トンの物資を積んで日本を出航、2週間後にオーストラリアのフリーマントルで待機中の観測隊員とともに南極へ向かいます。南極観測支援に関して我々のタスクは基本的には変わっておりませんが、なにしろ南極という大自然の中での仕事、その年の状況により行動の態様も大きく様変わりすることがあります。

定着氷域への進入、「昭和第一便」発艦！

12月上旬に南緯55度を通過して南極圏に入りますが、フリーマントル出航後は海上が荒れることが多く、さらに暴風圏を通過する頃は艦の揺れも最高潮に達します。観測隊員の多くが船酔いに悩まれ、ろくろく食事も喉を通らないそうです。「5003しらせ」では動揺減衰装置が大幅に改善され、私が経験した艦の最大傾斜は「5002しらせ」で46度、「5003しらせ」では25度でした。

12月中旬には艦は定着氷域に進入し、動揺も落ち着きを取り戻します。「5002・5003しらせ」とも、氷の厚さが1.5mまでは連続砕氷しながら3ノットの微速で航行できる能力を備えています。

ここからが我々の出番、防錆処置を施したヘリコプターの「防錆解除」に始まり、飛行科全員によるブレードの取り付け作業など、本番の「空輸」完遂のため飛行科員としての本領発揮の場なのです。飛行作業は、接岸に先立って「昭和第一便」を発艦させることで、艦長搭乗のもと「氷状偵察」とともに紅白のデコレーションを施した初荷を観測隊員に届けることから始められます。昭和基地では、10か月間待ち侘びていた越冬隊員が工夫を凝らし、手ぐすねを引いて待ち構える中、ある年は上半身裸、ねじり鉢巻き姿の男衆が太鼓ならぬドラム缶を勇壮に打ち鳴らすパフォーマンスに度肝を抜かれるなど、すっかり昭和基地の風物詩となった歓迎風景が我々を楽しませてくれます。数日間は優先度の高い物資を基地へ空輸する作業が行われますが、そのあと艦は昭和基地沖への接岸を目指して再び航行を始めます。

接岸までの険しい道のり

次第に氷が厚くなり連続砕氷航行ができなくなると、艦は一旦40mほど後退して助走距離をとって一気に定着氷に乗り上げ、その重みで氷を割る「ラミング(チャージング)」と称する運動を繰り返して昭和基地沖への接岸を目指すのです。「5003しらせ」では、船底にステンレスクラッド鋼を採用することにより氷との摩擦抵抗を減らして氷に乗り上げやすくし、さらに融雪散水装置により大量の海水を艦の前方に散水し、氷上の雪を湿らせて氷へのグリップ力を高めることで砕氷能力が一段と向上し、厚さ数mという定着氷をラビングを繰り返しながら前進できるほど驚異的な性能を発揮することができるのです。

ところが平成23年と24年は氷が異常に厚く、接岸までの所要日数や燃料事情等の配慮から、昭和基地沖への接岸を断念せざるを得なかったこともありました。この時の氷厚は10mを超えていたということです。このため艦と基地間の距離が延び、飛行時間が増えて一回当たりの積荷量が少なくなるのは必然です。一方で雪上車による物資の運搬も、潮汐や強風による氷上の激しい起伏や薄氷箇所、クレバスに加えてこつ然と猛威を振るう南極特有のブリザードなど、とてつもない大きなリスクを伴う作業なのです。

毎日が筆舌に尽くし難いような苦労の連続の中で、士官室では連日のように輸送物資の優先順位や輸送量、輸送方法等についての話し合いが行われ、関係各部がそれぞれの職分を弁え、一つの目的・目標に向かってお互いに協力し、助け合うことによって困難な状況を乗り切り任務の達成ができています。＜次号に続く＞

＜竹林 穰 支部理事役(海)＞

「海軍築城」とは？ 戦時中海軍が手がけた築城施設について

＜前号から続く＞ 海軍建築部法令の改定に伴い、各鎮守府(現在の地方総監部に相当)の建築部は、「施設部」に改称するとともに

組織の拡充に全力を投入した。「築城施設」の急速な需要増により、施設部門の人員だけで当初の十数倍に膨れ上がったと言われる。

S19年に入り横須賀施設部に千数百名規模の第300設営隊(「300設」)が編成された。それまでの設営隊は南洋方面の飛行場施設や防御施設の建設を主としていたが、本土防衛の必要性が高まるに伴い「本土の築城施設」を担当する設営隊が各鎮守府に編成され、それまでの設営隊と区別して「内設」と呼ばれた。とは言え「内設」が担当する築城施設は”超重要なもの”に限られた。

館山(香・こうやつ)の正体不明の築城施設

構造はトンネル形状で床面、側壁、天井はコンクリート仕上げ、概測寸法は幅15m、高さ8m、奥行き20m近くあり、広く知られている宮城の掩体壕よりは一回り大きく、大型機用の「隧道(トンネル式)航空機掩体」と考えて良いであろう。しかしながら建設時期や施工者もさることながら、なぜ一機分だけ造られたのか、長い間その建設目的・用途等皆目分からなかった。

海軍施設系技術官の戦後の回想集から、この築城施設は前述の「300設」がS19年7月に館山に進出して建設したものであることが分かった。なぜ館山に？それほど重要な施設？、という疑問が残るが、海軍としてまだ大型機用の隧道掩体工事の経験・ノウハウが無かった。そのノウハウ確立のための「試験工事」して、あらかじめ計画(※)のあった館山・香の掩体壕を「実用を兼ねて」手がけたものと断定きよう。(※「館山航空隊戦備施設計画(極秘資料)」・艦上爆撃機5機格納用)。なお、工事が1機分で終わったのは、奥側が素掘りのままになっていることから、後の工事のための拡張性を持たせておいたものであろう。

この後「300設」は横須賀に帰り、横須賀空近郊に数カ所、写真のような爆撃機「銀河」を計40機格納できる隧道式掩体壕を完成させている(S20.3 第300設営隊戦時日誌より)。横須賀施設部の虎の子部隊「300設」はこのほかにも連合艦隊司令部横(横浜・日吉台)ほかの超重要施設を完成させ、最後は長野県の松代大本営の工事中に終戦を迎えている。

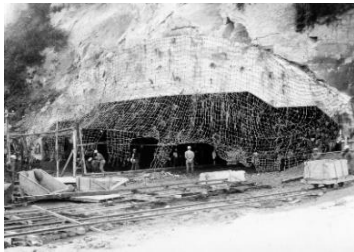
館山には戦争末期に構築された築城施設(いわゆる「戦跡」)が数多く残っている。終戦による記録の焼却・散逸により、それらの多くが建設目的・用途等不明のまま、根拠のない推測、憶測が「史実」として語り継がれている。

史実を究めることの意義は、歴史を正しく評価・認識することに結び付き、一見些細なつまらないようなことにも、歴史を大きくゆがめるような「ウソ」が潜んでいることがあるのである。＜次号に続く＞

＜自称地域史探索マニア その27(2/3)＞



＜飛行甲板での
ブレード取付作業＞
海幕公式サイトから転載



＜参考＞建設中の大型機用隧道掩体
(S20.3 横須賀空近郊)

館山での試験工事を通じて大型
機用隧道掩体工事のノウハウを
確立したと言われる